

展示会「ノートの中の青春」を開催

●附属図書館医学部分館

附属図書館医学部分館は、10月23日(火)から1月18日(金)までの間、医学部分館において、展示会「ノートの中の青春—講義ノートが伝える医学生の歩み—」を開催しました。

これは、同館内にある医学部史料室の所蔵品の中から、明治及び大正時代に、本学医学部の前身校である愛知医学



展示会の様子

校、愛知県立医学専門学校及び愛知医科大学で学んだ学生による手書きの講義ノートを表示する企画です。数学、解剖学、外科学、産科学、眼科学などの講義ノートには、ドイツ語も交えた個性豊かな筆致や、胎児の様子や指の仕組みなどを克明に描いたスケッチ、機知に富んだ落書きなど、当時の学生の勉学の痕跡がそのまま残されており、「若者たちの息遣いまで聞こえてくるようだ」と多くの来館者の関心を集めていました。

展示会では、関連資料として、明治9年に公立医学講習場へ着任した外国人教師アルブレヒト・フォン・ローレツ氏が、4年後に離任する際に惜別の辞として残した自筆の格言「Was Hänschen nicht lernt, Lernt Hanns nimmermehr. (意訳：少年老い易く学成り難し)」や、イギリス公使医員ウィリアム・ウィリス氏の指導を受けて、戊辰戦争に従軍した日本人医師が銃創治療にあたった時の記録で、クロロフォルム麻酔による手術を記載したのが国最初の記録とされている「北越従軍銃創図録」、さらに当時の学生や授業風景の写真、教科目変遷の資料、明治時代の医学校と病院の平面図なども展示し、来館者から好評を得ました。

博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ?～高木典雄とコケの世界～」を開催

●博物館

博物館は、11月23日(金)から2月2日(土)までの間、第25回博物館企画展「なんじゃ?もんじゃ?～高木典雄とコケの世界～」を開催しました。

同展は、本学教養部の教授で、世界的に有名な蘚類研究者であった故高木典雄氏と、同氏が発見したナンジャモンジャゴケを紹介するため開催されたものです。ナンジャモ



展示の様子

ンジャゴケは、「植物分類学にとって20世紀最大の発見」と評価する研究者もいるコケで、同展では、ナンジャモンジャゴケがなぜそれほど重要なのか、また、そのようなコケをなぜ高木氏が発見できたのかということを中心として、学内で現在進んでいるコケ研究なども展示し、研究者の生き様やコケの面白さを紹介しました。

高木氏のコケ研究に使われた資料や道具、ナンジャモンジャゴケをはじめとする各種コケの実物やレプリカのほか、同氏が集めた果実コレクションなど様々な標本を展示しました。また、杉田 康彦伝子実験施設教授、木下俊則理学研究科教授及び青木 稔之情報科学研究科准教授の各研究室の協力のもと、コケを使って行われている最先端の研究を紹介するパネルや、フラスコで培養したコケの展示も行いました。

若い学生から年配の方まで様々な方が来場し、来場者一人ひとりの滞在時間が長いことも今回の特徴でした。

さらに、12月8日(土)には、鳥取県立博物館の有川智己氏が「なんじゃもんじゃゴケ?」と題し、1月12日(土)には、国立科学博物館の樋口正信氏が「苔 こけ コケ」と題して講演し、それぞれ、未だ謎に包まれたナンジャモンジャゴケの解説と多種多様なコケの紹介を行いました。